



# 第一人者が語る、 幼児のための『書写』とは？

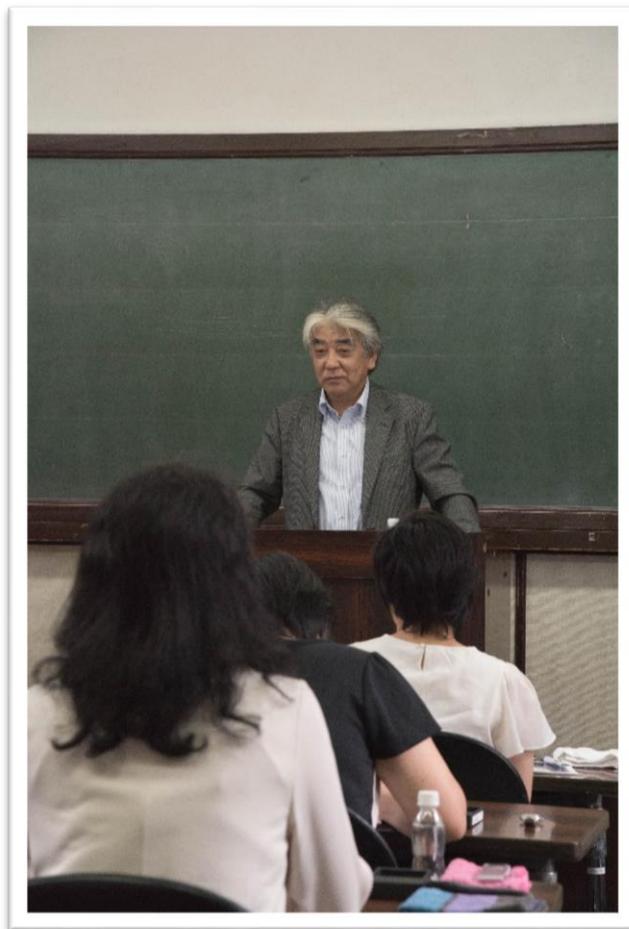
## 講師 宮澤正明氏

国立山梨大学教授

光村図書書写教科書 代表編集者・著作者

全国大学書写書道教育学会理事長

2015年9月27日(日)。横浜市港北区の小高い山の上にある、築80年以上を誇る歴史ある文化施設・大倉山記念館にて、宮澤正明教授をお招きしての講師研修会が行われました。講師研修会にはふでともかきかた教室の講師など約30人が参加しました。



### 系統的な指導を

自己紹介の後、本日の研修会の目的を語ってくださった宮澤教授。最大の目的は小学校での書写の学習※に結びつけられるように、幼児期から系統的な指導をすることが重要という認識をそれぞれがもつということでした。

最近、大半の子どもたちは小学校に上がる段階で文字の読み書きを身につけています。しかし、鏡文字や間違っただ筆順で覚えている子どもたちが大半。修正するのに時間がかかってしまうというのが最大の問題で、結局修正できずに終わるケースも多いのが現実です。こうならないためにも、系統的な指導の重要性を宮澤教授は訴えます。

※書写では、文字をひたすら書いて覚えるのではなく、文字や漢字の原理原則を学び他の文字にも転用できるようにすることを目的としています。文字のつくりを知ることで結果的に字形を整えていくことも身につくようになります。

系統的な指導方法についてみていきましょう。

### ポイント1 「正しく書く」=「文字の形を整える」

最初に議題になったのは「正しく書くとはどういうことか？」という点。「土」という漢字を、縦画を思い切り伸ばして書いた宮澤教授。これは「正しい」漢字といえるのでしょうかと参加者に問いかけました。参加者の多くは間違っていると回答。しかし、これは横画2本に縦画1本、という「字体」を満たしているため、正解といえるとのこと。しかしながら、「字形」が整っていないため、書写の考え方においてはアウトになります。字形を整えて書くのが、書写の目標だからです。



黒板右にある縦長の土は字体としては間違いでないが、書写の観点から見ると適切とは言えない

## ポイント2 訓読みで和語の意味を教え、言葉の学習へ繋げる

最近顕著なのは、音読みはできるが訓読みはできない人が増えているということ。「慮る」はなんと読むのかという問いを投げかけられました。正解は「おもんばかる」。配慮や熟慮のリョとして音読みはできても、訓読みとなると答えられない人が多いようです。

音読みは音だけを聞いても意味が明確に伝わりません。よって、漢字の読み書きはどうかできても使えるまでに達しないケースが増え、自信がなくて平仮名で済ませてしまうといった漢字を使わない層が広がっています。

学んだ漢字はどんどん使うことが望ましいわけですから、書写は字を書くだけでなく、言葉の学習と捉えるべきだということです。

## ポイント3 書く時の姿勢ってどう指導すればいい？

ことばで細かく説明するよりも、効果観面なのは「唱え歌」。足ぺったん、お腹と背中にグーひとつ、左手おいてさあ書こう！ 授業を始める前に、こんなフレーズで姿勢を正したら、子ども達も楽しみながら良い姿勢の取りかたを会得できます。とある小学校では、書写の授業に限らず着席する際には必ずこの唱え歌を歌いながら正しい姿勢を取るのだとか。

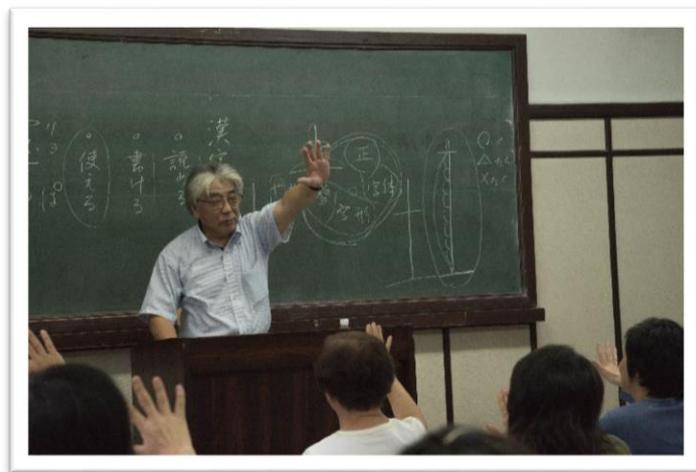
具体的には、足ぺったんで足の裏全体を床に置き、少し前に体重を掛ける→お腹と背中にグーひとつで拳ひとつの空きスペースをお腹と背中に作る→左手おいてで左手の手の平を45度になるようにおく(脇があくことによって力まない姿勢になる)となります。



## ポイント4 意欲を引き出すには「空書」も有効

立ち上がり、手を筆に見立てて体全体を使って空中に文字を書く「空書」。やってみせる先生はただ手で文字を書いてみせるだけでなく、手のひらを筆先と捉え、半紙についたと思われるタイミングで手のひらを開き、半紙から離れたら手先をつぼめるなど筆先の動きも再現して見せるといいとのこと。

体を使うことで、字を書く動作が動画として記憶にインプットされるだけでなく、表現したい欲求が生まれ、子どもたちは早く字が書きたいとそわそわしだすという体験談も語っていただきました。



参加者全員で空書を体験

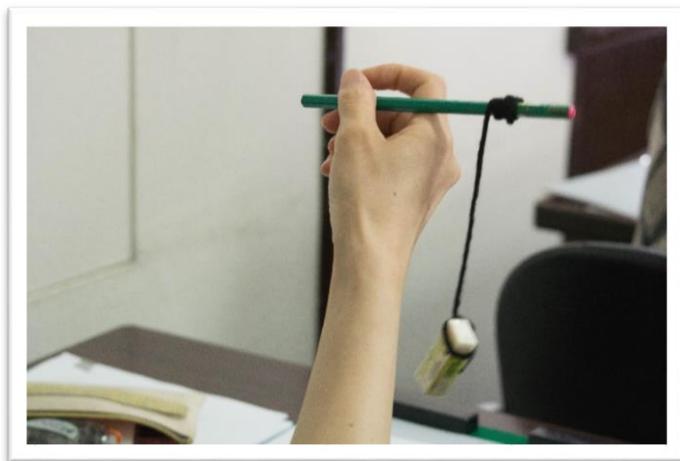
## ポイント5 鉛筆の正しい持ち方とは？

字形を整えて書くために重要なのは、やはり筆記具の持ち方。親指・人差し指・中指の3点を使いながら持つのが鉛筆の正しい持ち方であると言われます。しかし宮澤教授は、幼児レベルでは力が未発達なため、「正しい持ち方」を実践するのは難しいと指摘します。

そもそも鉛筆の太さは人間工学にのっとっておらず、万年筆が主流だったころの持ち方がそのまま流用されているとも。そんな中で少しでも正しい持ち方を実践するには、鉛筆は回転させながら使うという基本に則った指の使い方を意識するのが重要とのこと。

研修会では宮澤教授ご自身が考案された、鉛筆に糸と

消しゴムをつけ、3本の指で回して巻き付ける器具を見せていただきました。指を回転させながら鉛筆に糸を巻き付け、巻き付いたら指を回転させながら解いていく。この動作を繰り返すことによって、「鉛筆を回転させる」という動作が身につく、親指・人差し指・中指の3点を使って文字を書くということが自然とできるようになるとのこと。“巻きつける→解く”をゲーム形式で楽しむのもよいのでは？と宮澤教授。特に、年少や年中のお子さんはまだまだ集中して文字を書くのはきついの、遊びの要素も取り入れてみるものおすすめです、というご提案をしていただきました。



名付けて「消しゴムクレーン鉛筆」。正しい持ち方をしたうえで指を使わないと巻き付けるのは難しい

## 書いてみよう！ 基本点画

書写において重要な基本となる点画9つの書き方を教えていただきました。

### ①横画

最も頻度の高い画。斜め45度から入り、わずかに右上がりになるのが自然です。

### ②縦画3種

基本的には垂直。トメ・ハネ・ハライの3種類があります。

### ③左払い

5・4・3・2・1と力を抜いていくのがコツです。

最も多様なパターンがあり、「千」「人」「大」「川」の4種類に加え、「広」「成」のようなものもあります。

### ④右払い

左払いとは逆に、2・3・4・5で力を入れていき、その後横方向に払います。

### ⑤そり

弧の一部であることを意識して書きます。終筆は必ず「はね」を伴います。

### ⑥曲がり

小さな円の1/4であることを意識します。

### ⑦折れ

④を除く①～⑥の画の複合画。先行する画の終筆が次の画の始筆になるととらえておくこと筆使いは理解しやすいです。

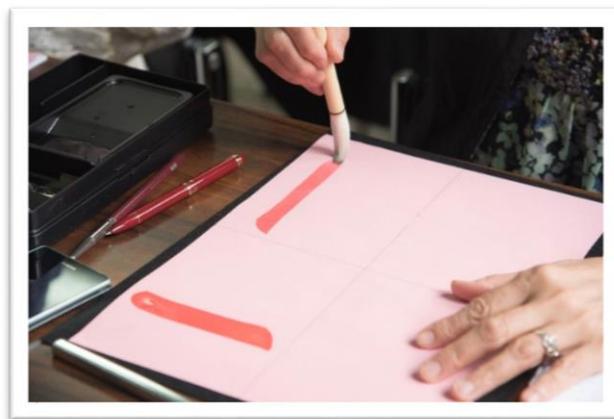
### ⑧点

短いながらも送筆部を伴うということを認識し、短い画と教えることがポイントです。

### ⑨右上払い

「ン」「シ」など。一番難しい点画とのこと。

この基本点画を理解するのが、書写では一番重要。幼児の段階では自由にさせてしまいがちですが、まずは技術を一通りおさえることが、やがて個性へと発展していきます。こうした基本の書き方を理解していれば、誰でも上手な字を書けるようになります。ですから、指導にあたっては、「勢いがある」や「子どもらしい」などといった基本ではない部分で評価するのをさけることが重要です。



大事なのは「書写を技術としてとらえた上で指導すること」ということばで締めくくられ、研修会は終了しました。

## 受講者の質問に答えていただきました



Q1 指4本で筆を持つよう指導した親御さんから相談が。この指導法は OK でしょうか？

A 間違いではありません。全鉤法(ぜんこうほう)と呼ばれる明治時代に流行した筆の持ち方です。ただし、学校教育の毛筆は鉛筆に応用するためのものなので、それを考えて。



Q2 書写の授業の回数は地域や学校によってばらつきがあるようですが？

A 回数は地域の方針によります。ただ、書写は準備と片づけに15分近くかかってしまうので、1時間では消化不良で終わってしまうと感じます。2時限続けてなど、まとまった時間をとることも必要だと思います。

## 受講した方々の感想！



字を美しく書くためには、それに基づく理論があるのだということがよくわかりました。難しいこともとても分かりやすく教えていただきました。ありがとうございました。先生のお話が具体的でわかりやすかったのは、先生の多くのご経験から導き出されているからなのだと感じました。(年中～小学校低学年担当 吉田)



国語科書写の第一人者ということで近寄りがたい存在と思っていましたが、とても温かいお人柄が感じられ、お話に引き込まれました。常にいろいろなものに問いかけ、先入観にとらわれず物事を研究していく姿に感銘を受けました。(年中～小学生担当 村上)



今後の指導の参考になります。ふだん聞けない話を聞くことができました。(年少～年長担当 明葉)



自分は大学院で宮澤教授に教わっていますが、何回聞いても勉強になります。小学生の指導にすぐ使えるものばかりでした。(小学校低学年を指導)



## 講師研修会を終えて



ふでともかきかた教室代表 前原洋子

参加された講師の方々には、実になる話しを聞けてよかったという感想だけで終わりにせず、今日得たことを活かす授業をしていってもらいたいと思います。本日の研修を活かし、より良い授業を通じて子どもたちに貢献することに力を尽くして欲しいです。

宮澤先生、本日は素晴らしい研修会をしていただき、ありがとうございました。